

森の自由人 119

狸泥舟

寿吉

やっと四万十市に着いた。かつては中村と呼ばれ、高知県の西南部、旧幡多郡^{はた}の中心都市だった。幡多郡は摂関家である一条家の荘園で、応仁の乱のとき前関白一条教房^{のりふさ}が都から逃れてきて築いた町である。かつての土佐の国は不便^{りくづた}で陸伝いでは四国山地を越えることがむずかしく、もっぱら海路に頼っていた。そのような辺鄙^{へんび}な地に前関白がお越しになったのだ。身分の高さや文化の香りに恐れ入って、国人たちは国主に奉った。辺土の中でもさらに遠い中村が土佐の中心となったのである。一条家は、最後は四国制覇を成し遂げた長曾我部元親によって追放されるまで、戦国乱世を5代生き延びた。



写真 1 四万十市の中心中村

中村の町は西を四万十川、東を後川が流れ、京都の桂川と賀茂川になぞらえる。町割りは基盤の目、小京都と言われる由縁である。町の西側に小高い山があつて四万十川と隔てられているが、この山に中村城があつた。いわゆる詰めの城で、緊急時に籠城するようになっていたのだろう。今では為松公園となつて、模擬天守が建っている。中は郷土資料館だ。

その小山の北側が丸の内。いかにも城下らしい地名だが、実は造成地なのだ。そこに「旅の宿^{じゆきち}寿吉」がある。妻の同級生の従姉夫婦が切り盛りしているのだが、居酒屋でもあり、総菜を地元のスーパーに卸してもいる。

一言で存分に土佐が味わえる宿である。味わえるのは、地元幡多の食材を使った郷土料理と土佐の人だ。生粋の幡多っ子の女将との掛け合いが面白い。地元のお客との交流も楽しめる。

今回は4泊したが、1泊8,500円。ご主人がせっかく来てくれるお客さんに悪いとずっと値上げしなかったが、今年ようやく500円値上げしたそう。女将がいかにも苦々しげに言ったが、この値段じゃ半分趣味のようなもので、お客との交流が楽しいようだ。けっこう有名人も来るらしい。



写真 2 ふるさと酒場・民宿寿吉



写真 3 初日のメニュー

夕食は、天然ウナギの天ぷら、川エビ、ヨコ（ホンマグロの幼魚）の刺身、ニロギ（標準名ヒイラギ）の唐揚げ、ウツボの唐揚げ、クジラのカツ、カツオのたたき、カツオの刺身、破竹とエンドウ豆の煮物、イタドリの煮物、ワラビのお浸しなどが郷土料理で、このほかに一般の創作料理もでた。もっともこれらは、4泊の間にでたもので、写真3だと物足りなそうに見えるが、これにビール飲んだら、腹パンクだった。

為松公園朝散歩

朝は、中村城址へ散歩。寿吉から1分ほどのところに四万十森林管理署がある。中村営林署と言った昔は市内の小姓町にあった。繁華街のすぐ隣で飲み屋だらけだった。月1度の出所日には森林官や事業所主任らで飲み歩き、まず5件は回った。飲めない私は途中から抜けて寮で寝ていると、起こしにくる馬鹿者がいた。とにかく割り勘だけはよく払った。寿吉の前身「王将」も近所だった。

その市内の営林署を売り払って、低地価の丸の内に移転し、土地の差額を国有林野事業の運営に充てたのである。昔は幡多郡に6か所あった営林署も今はここだけである。それ



写真 4 四万十森林管理署

も少ない人数で四苦八苦しているのだと思う。かつてのように飲み呆けて散財し、地域貢献することもなくなった。寂しい限りである。

中村城址への坂を登る。とても町中とは思えない鬱蒼とした天然林である。私の歳ぐらいの林齢（70）はあるだろう。方々にイノシシ注意の看板がある。クマが出ないだけましかな。昔は、幡多地方にもツキノワグマがいたのだ。クマハギといって、クマに剥がれた樹皮の巻き込みが、ヒノキの品質を損なう。クマがいた証拠はあるが、四国で現在生息するのは剣山系に30頭ばかりとか。

けっこうな登り坂を木々の呼吸に合わせて登ると、カツ、カツと後ろから人が近づいて来るようだった。振り返ると私と同じ年配の男性が登山用ステッキを突きながらやってくる。

「おはようございます、散歩ですか」

と声を掛けてみた。

私の東京弁が懐かしいと言い、すぐに打ち解けた。私はいつも妻から江戸言葉がきついと批判されるが、それをうれしく思ってくれる人もいるのだ。その男性Oさんは元西土佐村の黒尊の出身だった。黒尊には中村営林署の製品事業所があって、素材生産（伐木造材）を行っていた。労働運動の激しいところで、高知営林局の管内で西の黒尊と恐れられていた。

Oさんは、かつて全国の奥山を渡り歩いた木地師きじしの末裔まつえいだった。木地師は、主に広葉樹を轆轤ろくろで丸く削ったり、削り貫ぬいたり加工して、椀や盆などをつくる人たちで、手ごろな原材料を求めて山中を集団で移動しながら生活した。

Oさんの親父さんは黒尊事業所で働いていたそうだが、本人は郵便局の職員になって横浜で勤めていたそう。向こうで彼女もできたのに、上司が高知に帰してあげようというお節介で、彼女と別れて帰ってきた。多少残念そうに語るのが微笑ましい。



写真 6 中村城模擬天守・郷土資料館

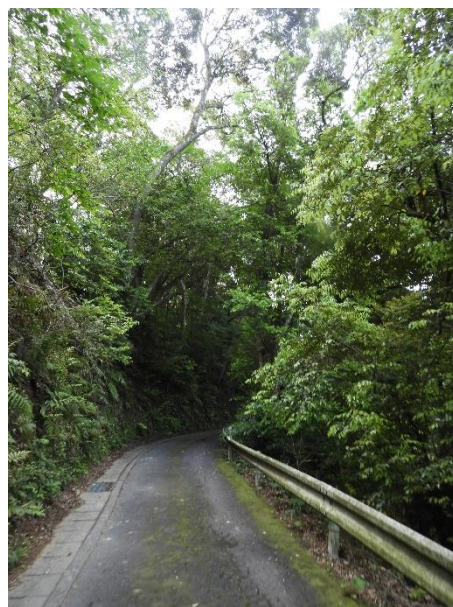


写真 5 為松公園林相

当時は労働運動最盛期の最後で、全林野も全通ぜんていも激しい闘争を繰り返していた。

「働くなと言うんですからねえ」

まったく大した時代だった。それが祟って、郵政は民営化、林野は一般公務員化した。そう考えると林野は焼け太り感がある。

黒尊は四万十川の支流の黒尊川が流れ、四万十川の中でも清流で有名だ。Oさんはそこで薪ストーブのある家を建てて、週一で通っ

ているとか。羨ましい。これから孫を小学校へ車で送るのだと、為松公園を1周して帰っていった。雨で朝散歩できなかった最終日を除いて毎朝出会った。

四万十川

ようやくコロナウイルスの影も薄らいで、老人ホームでも自室での面会や外出もできるようになった。ばあちゃんは100歳とはいえ驚くほど元気で、足腰はしっかりしており、耳が遠いことぐらいが難点か。郵便局や信用金庫、補聴器屋などへ行っても、ちゃんと対応している。

土佐清水市の^{しものかえ}下ノ加江というところに92歳の妹がいるので、そこに連れて行った。四万十市内から四万十川に掛かる赤鉄橋を渡ってすぐ左折、堤防上を河口へ向かって快適に走る。この辺りはアオサとアオノリの産地である。

両者は、似たようなものだが違うらしい。四万十川財団の清流通信によると「たこ焼きや焼きそばなどに振りかけるアオノリは、汽水域に生息する。四万十川では最も香り高く高級品とされるスジアオノリが自生していて、収穫期のノリ干しは冬の風物詩となっていたが、2010年以降収穫量が激減し、2019年から収穫がない」そうだ。

一方アオサは、「塩分に対する適応範囲が広く、外洋から汽水域まで生息する。塩分が低いほど大型で薄い膜になるため、河口付近の汽水域が養殖適地となり、四万十川でも河口で養殖が行われている」そうなのだが、こちらでも2023年から収穫できていないそうだ。養殖網にシオミドロという^{かつそう}褐藻が付着して、アオサの繁殖を妨げているようだ。

このような状況に、高知県や四万十市、研究者らが調査していて、高水温や砂州の消失などが原因と言われているが、よく分からないらしい。

私の偏見では、四万十川に洪水が起きないことも影響していると思う。これはアユの成長に欠かせない^{かわごけ}川苔の不作と同じだと思うのだが、洪水で川底に堆積した泥がかき回され、流れていかないからだ。洪水による川底の攪乱がないと環境がリニューアルしない。私が知る限り相当長い期間四万十川で洪水は起きていない。生息環境の攪乱は、あらゆる生物にとって更新の起点である。

とんだ寄り道してしまった。そんな現実はどこへやら、河口近くの四万十川は周囲の新緑の山々の中、川幅も広くゆったりして、青空を写して真っ青である。

四万十や川空山海それぞれの青

市街をちょっと出ただけで、これだけの自然を満喫できる。四万十川の写真は、山中を流れるものが圧倒的に多い。私は、河口付近の広々とゆったりした構図が好きだが、私のストックにもなかった。別に急いでい



写真 7 四万十川河口 堤防の向こう

るわけでもないのだから、車を止めてシャッターを押すだけでいいのに。来年は、そのことを意識して撮ろう。

下ノ加江で、ばあちゃんは実家の墓参り。山際にあるので車を降りてから少し山道を登るのだが、さすがに豪^{えら}かった（大変だった）ようだが、まあ 100 歳ぜよ。

妹の家に行くと、その息子（私の妻の従兄）も来ていた。従兄が「おかあちゃんも同じ施設に入ったらええねえ」と言うと、ばあちゃん「いかんいかん、あげな（あんな）ところに入ったら^{しま}終いぜよ。どこっちゃあ（どこにも）行けんし、人間がだめになる」

従兄は松山市在住なので、多少認知の^け気のある母親をいずれは施設に入れなければならないと思っているのだが、このばあちゃんの意見にはいささか参っていた。

アズリッシモ足摺

翌日、妻と 2 人で最近絶景で評判のアズリッシモ足摺というレストランのランチに行った。足摺岬付近で特徴的な海成段丘上から少し下ったところにレストランがある。その木製のデッキに上がるといかにも太平洋の大海原に飛び出しているような感覚になる。



写真 8 アズリッシモ足摺の展望デッキ

種明かしをするようで申し訳ないが、このデッキは写真 9 のようにちゃんと陸地の上に乗っかっているようだ。デッキの周囲の水張が機能して、海に飛び出して見えるのだろうか。

この日は、波が静かで太平洋は湖のようだった。台風銀座の足摺岬からは信じられない光景だった。

高所恐怖症なら足が^{すく}竦むところだ。何故かデッキの周りに堀のように水が張られているが、妻は足湯でないかという。確かに足摺温泉があるから、さもあらんと足を漬けたら大恥をかくところだった。ただの水である。

しかしこの爽快な景色はどうだろう。太平洋上を飛んでいるようだ。食事は建物の中であるのだが、デザートだけはデッキの上のテーブルでいただくことができる。



写真 9 中央の青い部分が展望デッキ